

書評 杉浦日向子著『風流江戸雀』（新潮社、1991）

（新潮文庫 す-9-2）

文学部 1 年 川島かつ江

本書は古川柳の中でもなじみ深い佳句を取り上げ、その情景を著者の江戸情緒たっぷりの漫画で描き出した四十三話の作品集です。そこに取り上げられているのは、雪見、雛祭り、花見など一年を通して綴られる庶民の暮らしであり、職人、長屋の女房、若旦那、町娘、お妾さん、居候、丁稚などの愛らしいキャラクターたちが見せる人々の心の機微です。どれもどこか懐かしく、ちょっと切ない気持ちにさせられるお話です。

元となった古川柳の多くは『俳風柳多留』に収められたもので、江戸中期句会で詠まれた句を柄井川柳や呉陵軒可有らが選句、編集したのが始まりです。その後川柳は町人文化を背景に大流行しました。粋を気取った旦那衆が日常の閃きを五七五に託したに違いありません。でも残念なことに、図書館に鎮座する『俳風柳多留』を手にする人は少ないでしょう。古典というカビ臭さと現代人との感性の隔たりが私たちの興味を遠ざけているのかも知れません。本書はそんな私たちに親しみ易く古川柳を紹介してくれています。

私たちは江戸時代なんてテレビの時代劇でお目にかかるだけの遠い昔と思いがちです。着物に丁髷に身分制度、殿様にお侍に花魁、どれも現代とはかけ離れた存在です。しかし、たかが二百年前の事、ひいおばあちゃんが生れた頃の話です。著者の漫画はそんな時代劇っぽい仰々しさに煩わされず、素直に江戸人の気持ちを伝えています。漫画の中では、登場人物の着物や髪型、風景や町並み、家の造りや調度品に至るまで、どれも忠実に描写されており、庶民の暮らしぶりや時代の雰囲気を読み取る事が出来ます。しかも、そこに登場する人物の行動や心模様は、恋心や嫉妬や慈愛など私たちの心にストンと収まる正直さを持って描かれています。今を生きる私たちと過去に生きた彼らとの感性の共通性、平凡な営みの中に繰り返されてきた日本人の普遍性のようなものを感じさせてくれるのです。

本書は素直に漫画として読んでも十分に楽しめる作品です。ですが古川柳の魅力、古典の楽しみ方を教えてくれる本でもあります。古典と言うと敷居が高いようですが、ご先祖達の言葉を綴った物と考えればもっと身近になります。作中のキャラクター達は私のご先祖であり、同じ江戸の土地でこんな暮らしをしていたのだらうという地続き感を持って親しむことも出来ます。そして二百年を飛び越えて、彼らの笑いや人情や恋心に懐かしくちょっと切ない気持ちにさせられてしまうのです。